



20年ぶりのメコンデルタ紀行

海 田 能 宏*

1994年8月、20年ぶりにメコンデルタの土を踏んだ。20年前といえばまだベトナム戦争の末期だった1974年、7月と8月の約2カ月間、同僚の高谷好一、福井捷朗両氏に連れられてここを歩きまわったものである。その時はバンコクのエコン委員会を頼って政府農業省にコンタクトし、政府のジープを出してもらってお付きを従えて、とにかく行けるところはすべて足跡をのこした。とは言え、デルタの大半が敵味方の境界の不明な「戦場」であったから、幹線道路沿いばかりを見てきたような気がしている。道路がだめなところは、とくに頼んで政府側の郵便軽飛行機に便乗して上空から見聞したものであるが、やはり隔靴搔痒の感は拭えなかった。

このような調査の中からも、私たちはたいへんすっきりした結論を導きだした。¹⁾ 図1に示したように、一種のクライマックスに達したとも言えるような、環境適応的な稲作体系を見出し、それを説明できたことである。このことは、後でまた触れよう。

私は、先のメコンデルタ行の直後から3年間、メコン委員会に勤務した。はじめはカンボジアの洪水制御の問題を担当しており、そして終戦を迎えると共にメコン委員会が半ば崩壊して具体的な事業を遂行することができなくなった期間は、メコン本流計画の長期展望を練るプロジェクトに参加していた。そんなことで、少なくとも1970年代はメコンデルタと直接の関わりをもち、80年代前半は東北タイ農

村研究を通してメコンへの関心を持続させていた。しかし、80年代後半以降のドイモイを契機とするメコンデルタの大変貌については、うわさには聞きつつも実見する機会がないままに打ち過ぎてしまっていた。ここ10年ばかりは、私はベンガルデルタや中国広州の珠江デルタを見る機会をもち、アジアの大デルタの比較研究に関心を高めてもおり、いろいろな意味で今回のメコンデルタ行には少なからぬ期待をもって臨んだ。

今回はチムさんと一緒だった。彼はカントー大学農学部土壌学研究室の講師で、1989年に来日し、同僚の古川久雄教授のもとで「ベトナム・メコンデルタの農業生態環境と土地利用」と題する博士論文を仕上げ、この年(1994年)の3月に帰国したばかりである。²⁾ この間彼は単独で、また古川教授と田中耕司助教授に伴われて、何度か現地を歩きまわっている。20年間の土地利用の変化をきちんと見ておこうという今回の目的に、彼ほどの案内役はまたと得られたものではない。私は、彼の博士論文を熟読してこの調査にそなえた。

I 限界への挑戦

この章では、メコンデルタの土地利用と作付体系に関して、1974年の私の観察と1994年のそれとの間に画然たる差があったいくつかのを中心に述べたい。1974年の土地利用は、先に私たちが見出し

* Yoshihiro Kaida, 京都大学東南アジア研究センター; Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

1) 高谷、海田、福井それぞれの英文レポートは『東南アジア研究』12巻2号(1974年9月)に掲載されている。また、特集「メコンデルタの自然と農業」『東南アジア研究』13巻1号(1975年6月)においても、上の論稿に加えてより広い立場からメコンデルタの農業を論じている。

2) Nguyen Hun Chiem, 1994, 博士論文 "Studies on Agro-ecological Environment and Land Use in the Mekong Delta, Vietnam." さらに、この博士論文の土地利用に関する部分は、Nguyen Hun Chiem, Former and Present Cropping Patterns in the Mekong Delta というタイトルで『東南アジア研究』31巻4号(1994年3月)に掲載されている。

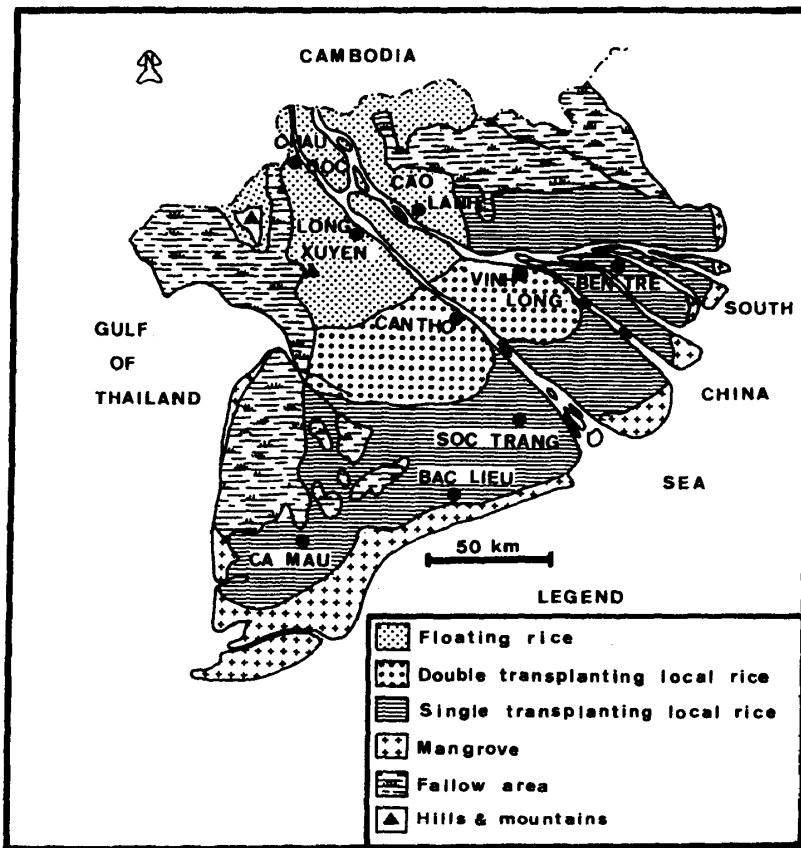


図1 1970年代はじめの土地利用。大きく分けると、氾濫原の浮稲，アクティヴデルタの2回移植稲，下流域の大苗押し込み移植稲が特徴的であった。これらは、地形・土壌・水文環境によく適応していた。(オランダチームや京大チームの観察にもとづいて、Nguyen Huu Chiemが描き直したもの、1994)

た類型をチムさんが単純明快に描き直した図1を参照していただく。これに比べて現在の土地利用はたいへん複雑である。チムさんが見事にまとめあげた図2によると、何と21類型が見出される。この20年で大変な変化が生じたわけである。新しい土地利用様式や技術についての詳細はチムさんの博士論文に詳しいので、ここでは、私のザクツとした印象を述べることにしたい。取りあげたいトピックスは、かつてごく一般的であった浮稲が消滅したこと、アクティヴデルタの樹園地化が猛烈に進みはじめたこと、海岸地帯に特徴的であった大苗押し込み式移植体系が変貌しつつあること、酸性硫酸塩土壌地域の中へ急速に耕境が広がりつつあること、それにマングローブ地帯におけるエビ養殖の盛衰である。いずれも、私にはかつて予測し得なかったことであり、また、限界状況へ挑戦するベトナム人の気迫が感じられることばかりである。

(1) 浮稲の消滅と二期作化

浮稲がなくなったという。本当だろうか。8月18日、カンボジア国境の町チョウドックへ行ってみる。かつての浮稲の中心地である。なるほど、田面は濁った水が波打っているのみである。チョウドックの西10キロの標高200メートルほどの岩山ビンテに上ってみる。頂上からは、北はカンボジアのタケオから南はチトンの岩山群方面までを見渡すことができる。目の下のキンテ水路から数キロ向こうまでは濁水に見え隠れするような浮稲の淡い緑を認めることができる。そこはカンボジア領だ。しかし眼下のベトナム領はただ濁水が広がるのみである(写真1)。見事に浮稲は消滅した。

ベトナム人は年一作の浮稲のかわりに、洪水の前と後の二期作を選んだのである(図3)。

激しい雨の中、二期作の実態を見んものこの地域に分け入ってみた。彼らの生命線は水路とその堤

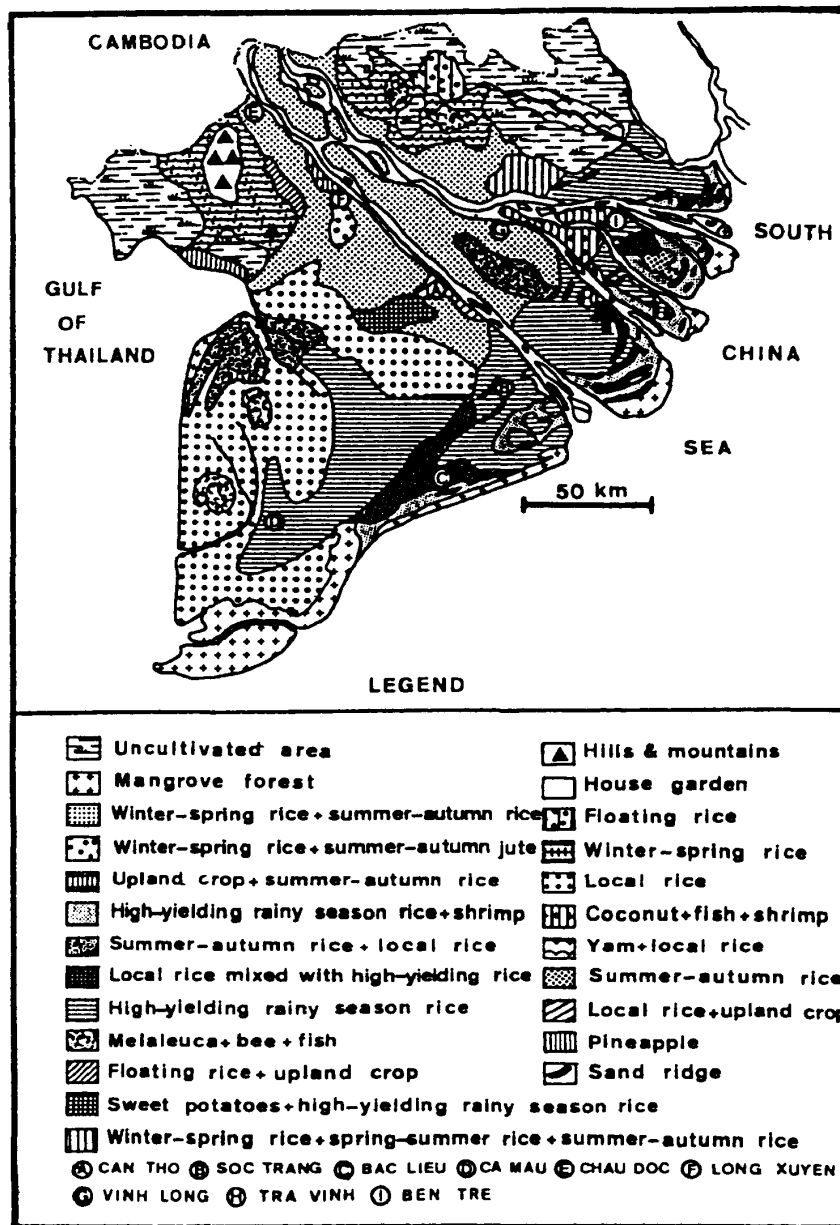


図2 1990年代はじめの土地利用。21 類型に分けられている。(Nguyen Huu Chiem 1994)



写真1 ビンテ岩山の上からカンボジア方面を望む。画面上を左右に横切る、半ば水没した水路（キンテ）から向こうはカンボジア。半ば水没しつつ浮稲が育っている。手前ベトナム領内では、浮稲は完全になくなった。

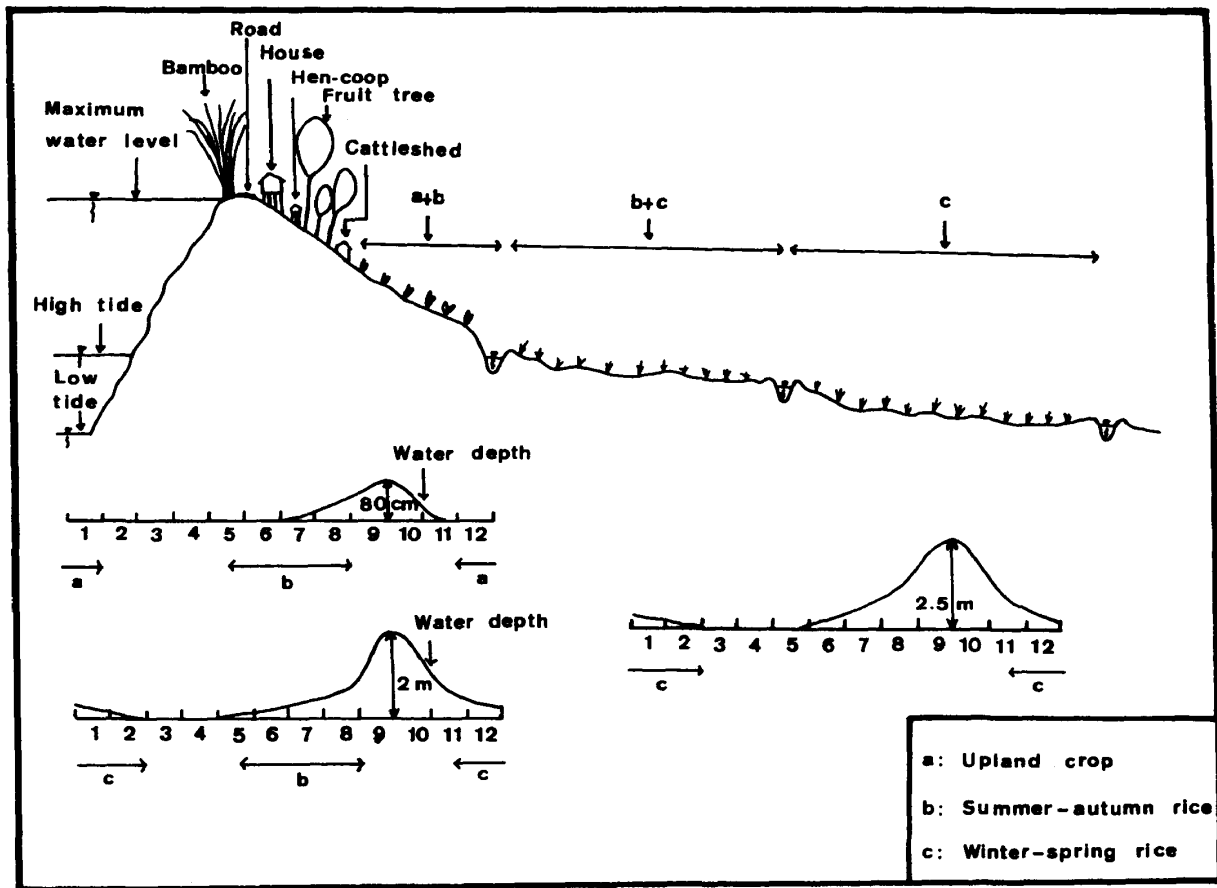


図3 洪水期を避けてその前後に稲を2作つくることが簡単にできるようになった。2.5メートルを越える深水地帯は、さすがに年1作である。(Nguyen Huu Chiem 1994)

上の道路であることがわかる。浮稲時代には、稲田での労働は耕起散播と収穫のみですんだから、集落と稲田はうんと離れていたものだった。今はそうはゆかない。そこで、水路沿い道路沿いの僅かな空間に密集して、まるで鳥小屋のようなちっぽけな杭上小屋を建て、一家固まるように住み暮し、水位の上昇に追われながら急ぎ収穫して、道路脇で脱穀し、モミは竹ゴザでつくった直径2メートル高さ3メートルほどの円筒形のサイロに貯蔵し、それを同じく道路脇においてビニールシートで覆って濡れそぼるのをかろうじて防いでいる、という有様である。いま洪水期が近づき、水面は道路下50センチ床下30センチに迫っている。もう一雨来ると危ないものだ。もちろん彼らの本家ははるか彼方の木々に覆われた自然堤防上の本来の集落の中にあるのだろうが、生産現場はすべてがドサクサの中にあるという感じである。

(2) 園地を求めて

私たちは先に「2回移植稲地帯」を特徴的なデルタの農業景観としてとらえ、その地域がほぼアクティヴデルタ、すなわち現在も堆積作用が進みかつ潮汐による一日の水位の変動が大きい地域に一致することを見出した(図1参照)。この地域のとくに河川や大きな運河に沿うベルトは見事な果樹園地帯になっていることも指摘しておいた。

一作の稲を2回も植え直すという面倒な稲作様式は、もちろん完全に消滅した。それは完全二期作に置き換え、また果樹園地帯は河川や運河に沿う細長い帯からずっと幅広い帯へと拡大しつつある。簡単に言うと、この地帯全体がいくつもの小さい「輪中」群からなる地域へ変貌したのである。輪中が築かれると、そこへは干満水位差を利用して自由に淡水を引き入れ、また過剰な水を排除することができる。増水期で約1.2メートル、乾季になると1.5メー

ルほどの干満差があり、かつ塩水侵入はほとんどないかあっても未だ顕著ではないからである。輪中の内部の水条件は年間を通じて簡単に操作調節されるようになった。

図4のように輪中を築き内部に高畦をつくることによって、このアクティヴデルタの土地は容易に果樹園に変貌しうる。一見ほとんど柑橘類が栽培されている。ただし、よく見ると、マンゴスチーンがあり、ベーテルナッツがありそれにキンマが纏わりついて這いのぼり、タロイモも植わっており、竹叢、そして輪中堤にはリュウガンなども植えられている。輪中へ導かれる小用排水路脇には屋根材につかうニッパヤシも植えられている。果樹園が広がりだしたのは、もちろんドイモイ後のことで、市場経済化に伴って我も我もと一斉に柑橘を栽培しはじめたのである(写真2)。もうひとつの必要条件は水路の高密度化である。これは、メコンデルタのほぼ全域で生じたことなので、少し詳しく述べる。

共産主義的政権の下では、なぜか水路掘りが奨励され、多くの場合人民は強制的な賦役労働にかりだされる。メコンデルタではこれがとりわけ顕著であり、一時期は年間2~3カ月間もかりだされたようである。人海戦術であった。北から来た役人の言う

まま、ただやみくもに水路を掘ったという。

アクティヴデルタのある地方では水路を堰き止め、巨大なポンプ場を設けて乾季の灌漑域を広げようとしたこともあった。たまたまここは乾季には1.2メートルもの干満差があり、ポンプを用いるまでもなく近在の輪中には十分な用水を引き入れることができたという。おまけに、このポンプは容量が大き過ぎてあつという間に水路内の水が揚水されてしまい、間欠的にしか運転できなかつた。北の「近代技術」が何の修正も加えられないままに適用されると、こんなことがしばしば生じたらしい。人々は、



写真2 新しい輪中果樹園がつけられつつある。ここもミカンだ。

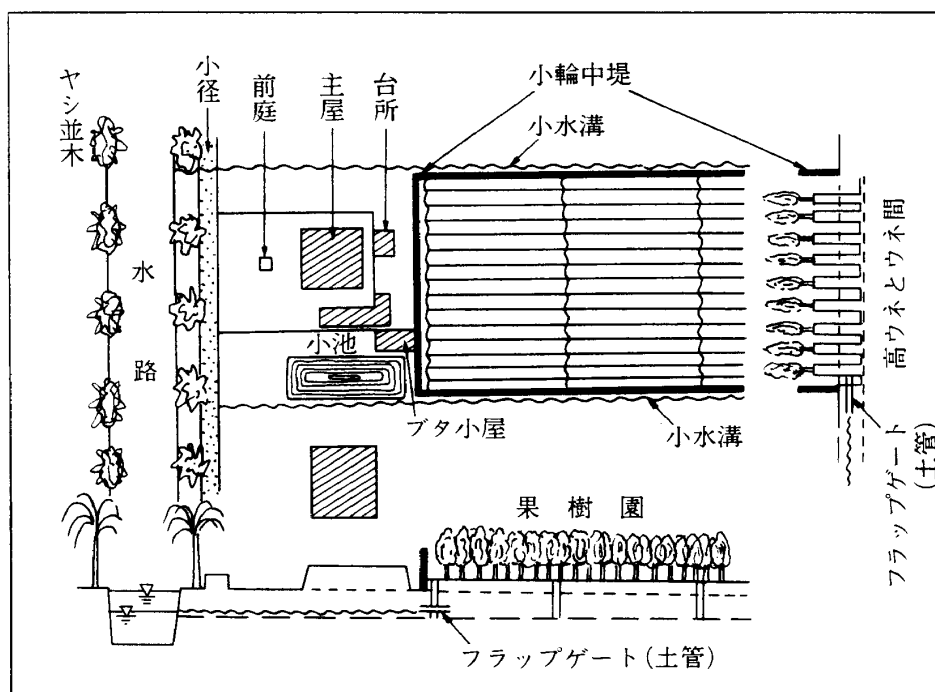


図4 輪中・高ウネによって果樹園を造成してゆく。潮位の干満差が大きいので小輪中堤にフラップゲート(ゲートつき土管)をもうけて自由に水の掛け引きができる。

なんでまあこんな無駄をするもんだと、陰で嘲笑しながらも面と向かっては逆らえず、不承不承工事に携わったという。いまは、勿論、このポンプ場は「遺跡」となっている。

上のような調子で、この時期やみくもに掘られた水路の8割は機能しないまま打ち捨てられている、とチムさんは推定する。しかし、残りの2割が効いたのである。多くは大きな水路に直交する枝線水路が掘られ、さらにそれらの枝線を元の大きな水路に平行する方向に繋ぐ小溝がほぼ200メートル間隔で掘られた。この連結水路が効き、日々の干満の水位変動が伝達される地域がぐっと広がったのである。この水文環境の変化があったればこそ、市場経済化に伴って広範な輪中ブームが起ったのである。

輪中ブームというか、柑橘作ブームは、このままでは先行きが心許ない。というのは、誰も彼もが一斉に柑橘作に集中するものだから、すでに国内市場が飽和しかかっている上に、品質に難があるので輸出市場をねらうのはいまのところ無理があるからである。品種改良や栽培技術の基礎的研究、その普及事業およびマーケティングの整備などが平行的に進められることなく、市場経済とそれへの過剰な期待が一気に開いたことの後遺症がいま出かかっていると言っている。後で述べるように、県、郡レベルの、はては村役人にいたるまで、二言目にはマーケティング、輸出の可能性ということに言及するのは、このような一種のあせりの表明であるように、筆者には思えたのである。

(3) 海岸平野

8月23日、ソクチャンからミタンの海岸へ向かって車を走らせていた。私にもチムさんにもこの海岸平野の稲作様式がどうもピンとこない。約半数の田区ではIR-46の二期作目の田植えが終わっているのであるが、残りの田区ではHYVを収穫した跡に在来品種を植えており、また別のところはどうも一期作でかつ品種は在来種ありIR-8ありIR-46ありで雑多きわまりない。また、1割程度の田区ではあるが、昔ながらの在来品種大苗押し込み式田植え風景が眼前に展開されているのではないか(写真3)。ここは1974年の記憶では確か一様にこの大苗押し込み式田植えであった。表土にかなりの塩分を



写真3 海岸砂丘列のラグーンにおけるクメール人の田植え。十分な雨を待って8月も半ばになって、80センチはある大苗を押し込むように植えてゆく。この光景は20年前と同じ。

含み、河川運河の水は完全な塩水で、したがって、十分な降雨で土壌塩分を洗い流した後に、8月後半になってようやく長さ80センチもの大苗を固い砂地に押し込むように田植えしていたものである。

この地域を突っ切って大きな感潮河川に出る手前で、私たちは低い堤防に突き当たった。看板を見ると、8カ月前に出来上がったばかりの防潮堤である。1993年6月に起工、30万人を動員して23,500ヘクタールの受益地を93キロの堤防で囲み、早くも同年12月に完工したとある。何と、IR-46の二期作を実行しているこのベトナム人たちは、防潮堤の完成後第一作目から作付体系をすっかり替えていたことになる。そして、三三五五悠々と例の大苗押し込み式田植えをしている人たちは、見るからにクメール人である。ベトナム人とクメール人の対応はかくまで違うのか。このことは、あとでまた触れよう。

(4) 酸性硫酸塩土壌の中へ

デルタ東部の大湿地帯は「葦の原」と呼ばれる。葦とメラロイカを唯一の植生とする、不毛の酸性硫酸塩土壌地帯である。戦後そこに新経済区(New Economic Zone)が設けられ、旧サイゴンの住民の一部を強制的に移して開拓が試みられた。それは、予想どおり絵に描いたように失敗した。ところが、その同じ地域がいま蘇ろうとしている。



写真4 水路によって一望千里の酸性硫酸塩土地帯を拓いてゆく。かろうじて住めるのは水路の堤防の上のみである。

その1 稲作

8月17日、幅広い水路にはとうとうと濁水が奔流している。あるかなさかの低い土堤には100メートルおきぐらいに掘立小屋が立ち並ぶ。一望千里、立木はない。家の前も後も横も、いまあるのは水、水、水だけである。しかし小屋の周囲を見ると脱穀後の稲藁が積まれ、そのいくつかはまだわずかに煙をあげている。稲は洪水期の直前ぎりぎりです事に収穫されたらしい。杭に繋がれた一雙の小舟と、この稲藁と、そして家の廻りを泳ぎまわるアヒルの群が、ここにも人々の暮しがあることをかろうじて示してはいる。しかし、よくもまあこんなところに人は生活できるものである(写真4)。

仕掛けは、従来どおり水路を掘り込みメコン本流の洪水期の莫大な水量をどんどん流し込むだけである。それによって酸を洗い流し、徐々に酸度を下げ、乾季にも十分な用水を供給して過乾燥にならぬように留意する。何も新しい工夫はないように見える。ただそれだけで、稲は栽培できるものである。しかし、それだけが成功のカギではない。成功の秘訣はいわゆる地元増反を基本としたことではないだろうか、私には思える。地元の、僅かの土地しか持たない若夫婦を中心に開拓者を募り、思い切って大きな土地を与えたようなのである。子供のない若夫婦は思い切りよく入植し、学齢期の子供をもつ夫婦は本家の祖父母に子供を預けてそう遠くはない堤上の一軒家に住み稲を育て、農繁期の週末と長い農閑期は子供と一緒に本村で過ごす。こういう安心がないと、人はこんなところに住めるものではない。



写真5 酸性硫酸塩土地域でも果実栽培が盛んになってきた。この主産物はパイナップルとカシュウナッツ。他にココナッツとジャックフルーツが見える。

その2 酸性硫酸塩土地帯での森づくり

チャオプラヤーデルタのような豊かな土地でユーカリやモクマオウの植林地を見ると、ああもったいない土地利用だなあと思うくせに、同じものをラクジャの強酸性硫酸塩土地帯で見かけると、おお素晴らしい緑だなと思ってしまうから我ながら不思議である。つい先頃までは、不毛の湿地だったこの地帯に、ちょっとした畦立ての工夫を施すことによって、パイナップル、カシュウナッツやユーカリなど耐酸性の強い作物や樹木がぐんぐん育つようになったのである。ユーカリは3年で数メートルにも育つし、カシュウナッツは5年も経てば胸高直径25センチぐらいの大木になる。この調子でゆくと、不毛の原野が緑の森に変貌する夢すら描けそうである(写真5)。

デルタの東部の「葦の原」では、同じようにしてまずヤマノイモを育て、少し酸が抜けるとキャッサバ、そして最終的にはバナナ、カシュウナッツ、コ

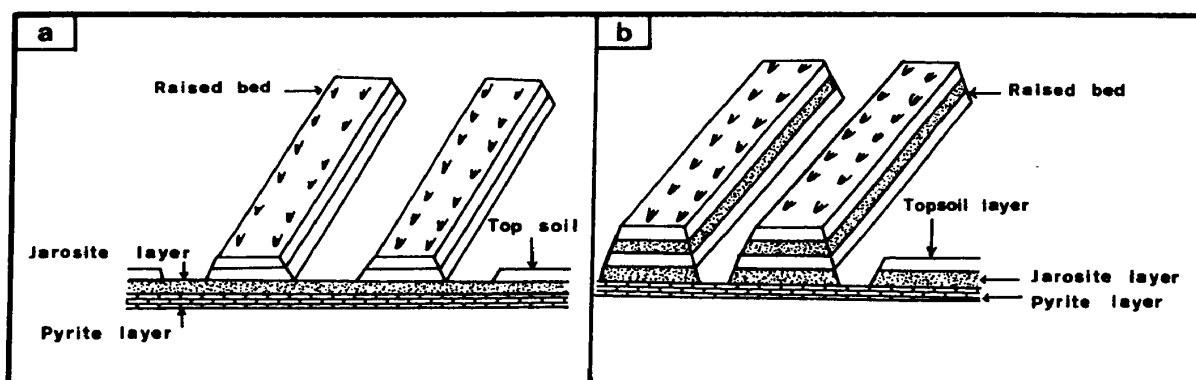


図5 ジャロサイトおよびパイライトを避けて低く畦立てすることによって、強酸性硫酸塩土壌も利用できるようになった。(Nguyen Huu Chiem 1994)

コナツやマンゴー園を造成してゆく試みが広がりがつつある。本来の植生であるメラロイカもいったんはほとんど伐りつくされたが、いままた植林が進んでいる。メラロイカは材を得るよりも、花期の長さが養蜂に適しているというので注目されだしたのである。

ちょっとした畦立ての工夫とは、いまとなつては単純なものである。ジャロサイトが出てくるぎりぎりの深さまで掘りこみ、高畦をつくるというだけである。畦間には自然に水が入ってくるが、酸度が強くて草も生えない。しかし、畦の上は不思議に大丈夫なのである。畦間の水位を調節できれば土壌水分や塩類集積の調節ができて好都合であるが、ユーカリやカシュウナツやパインアップルを栽培するぶんにはそんな贅沢は無用である。それよりも、降雨の度に効率よく塩類や酸性毒素を洗い流す工夫が大事である(図5)。

その3 再び稲作——商業的稲作——

メコン本流からはるかに離れた「葦の原」のど真ん中に通された水路の水は、青々と透き通っている。酸性の強い水はきれいに透き通るのである。ただし、魚も棲めない。水路が通れば付随して道路もできる。そうすると開拓者が入る。私が出た、そういう開拓者のひとは、50年配で、つい2年前までタンアンの町で砂利採取運搬(ジャリトラ)稼業をやって金を貯め、50ヘクタールの荒蕪地をヘクタールあたり600ドルという価格で買い入れ、息子を説得してつい1年半前にここに入ったという。最

初から大型トラクターを持ち込み、仮小屋を建てた後まずやったことは水田予定地への水溝の掘り込みと樹園地予定地の畦立てであった。十分に水を引き込むことによって、この強酸性土壌でも雨季稲作はヘクタールあたり3トン程度の収穫をあげうる目途をつけた。樹園地の方はヤマノイモにはじまり、キャッサバ、ヒョウタン、カシュウナツ、ココナツを高畦に植え込み、こういう耐酸性の強い作物ならば何とかやってゆけそうだとの感触を得た。息子と2人で、50ヘクタールという規模を活かした営農に挑戦してみたいと言うのである。こんな開拓者魂をもった者もどンドン入って来つつある。

(5) エビ池

8月24日、カマウの先のカマウ半島のマングローブ地帯のエビ養殖を見にゆく。例によってカマウの県事務所を訪問し、泥炭湿地の開拓の様子や、マングローブ林を伐り開いてのエビ養殖の様子を聞くことから始める。エビ養殖はどの辺で行われていますかと、壁に掛かった大きな地図を前にして聞く。何と、カマウ半島東南部ほぼ全域を差し示すではないか。冗談でしょう。去年はどうでしたかと聞くと、その3分の2ほどの面積を示す。一昨年は?さらにその3分の2ほどだ。では今年は?やはり先の通りの地域が示された。聞き間違いではなさそうだ。

雨のそぼ降る中、ボートに乗込んで現地へ向かった。ものの30分もたつと、水路沿いにエビ池への用排水溝と小さな手作りの水門がほぼ100メートル毎

現地通信

に現れるようになる。やはりエビ池は全域に広がっている。支線水路沿いにも、同じように用排水溝が並んでいるようだ。大半は今年から稲田をエビ池に転換したものらしい。マングローブの森はきれいさっぱり伐りつくされている。

エビの養殖はごく簡単である。水田の畦を高く補強して輪中状に造りなおし、水路と小溝で結び、簡単な木造の水門をつくれば、それで大方は完成である(写真6)。このあたりは平素でも干満差が1.5メートルほどに及び、新月満月の日には2メートル以上に達する。そのような日に水門を開けると、エビの幼生は潮に乗ってエビ池に流れこみ、2週間後の次の大潮時に再び水門を開けると幼生が流入してくる一方成長したエビは潮に逆らって水口に殺到する。それを一網打尽にして、ボートで出荷すればいい。カマウ周辺にはいくつものエビ冷凍工場が立地していて、自由な取り引きができる。このあたりの新しい粗放なエビ池では、まだ餌を与えることもないようで、手間とコストがかからず安直に現金収入を獲得できる。

今年は養殖エビがほぼ壊滅状態だという話はここに来る前に調査したチャオプラヤーデルタで聞いたし、インドネシアでもそのようだし、メコンデルタではチャビン県の海岸部でもいけないらしいし、古くからの本場であるブンタウ(ホーチミンの外港)では文字どおり壊滅していた。どうやらここ2、3年広がりだした病気が蔓延しているらしい。

エビ池のひとつに上陸して様子を聞いてみる。元



写真6 エビ池の水門。

ベトコン戦士で戦後は地元の警察署長を務めて退官したばかりだという初老の紳士は、エビほど安直に儲かるものはないと、双手をあげて絶賛する。エビのおかげで息子を上級学校へやれそうだと張切っている。エビがだめになりそうですが……と聞けば、エビがだめならカニがある、カニもだめなら魚にして、儲からなければまた水田に戻すさと、アッケラカンとしたものである。このような人たちだから、きっとこの危機を乗り越えるにちがいない。

1974年のことだったが、はじめてのランドサット1号が送ってきたメコンデルタの写真を見た時、カマウ半島のマングローブ地帯が虎刈り模様に見えていて、写真ながらその光景にショックを受けた記憶がある。ベトコンの隠れ家をあらわにすると、米軍機が枯葉剤を散布したようで、散布されたところが長形状に見事に裸にされていたのである。いま、その虎刈り模様は消えてしまった。何のことはない、マングローブ林は水田とエビ池に置きかわり、消滅したのである。

II 生産基盤から生活基盤の整備へ

(1) 小さな土工の積み重ねによって生産基盤は整備できた

ここで、農業土木を専攻するものとして、1、2の所感を述べておきたい。1974年の調査をはじめた丁度その時に、メコン委員会のメコンデルタ開発マスタープランが出版された。メコン委員会からの委託により、オランダのメコンデルタ研究チームが担当した、14分冊からなる労作であった。その結論の大枠は次のようなことであったと記憶する。

メコン河本流と8つの大分流から分水し、低平地により密度高く水路網を開鑿して、また海岸部の塩水侵入は防潮堤で防ぎとめる。こんな土木事業を先行させることによって、ベトナムメコンデルタ約350万ヘクタールの内約120万ヘクタールまでは比較的良好に制御された稲作地に変貌させることができ、乾季にも稲作が可能になる。しかし、この限界を越えて取水すると、メコンの本・分流システムに危険なほどに海水が侵入し、乾季の低水流量を何らかの方法で増強しないかぎり、デルタ下半部は塩害をまぬがれない。

1994年のいまこのデルタを見ると、ベトナム人は、ほとんど巨大工事を伴うことなく、このデルタの土地利用様式を、オランダ人の予測をはるかに越えて実現させてしまった。「葦の原」開拓のための大水路と何カ所かの海岸防潮堤を除けば、メコン委員会が想定したような近代大土木工事は行われなかった。代わりに、ベトナム人の人海戦術による協同労働、自分の土地のための小さな土工の積み重ね、それに自分の土地の経営のたゆまざる工夫が、すべてを変えたと言えるのである。将来きっと生じるであろう、デルタへの塩水侵入問題を除くと、このデルタの生産装置を改善するための土木工学的はたらきかけは、もう十分である。生まれ変わった土地をいかによりこまやかに経営して、ますます加速するであろう市場経済化に再適応させるかということが、デルタ住人のより大きな関心事であろう。

(2) 水路と舟運

メコンデルタの地形的・水文的環境と開拓過程からいって、舟運が発達していることは頭では理解していたつもりであるが、今回ボートを使ってあちこち移動してみて、このデルタには辺境がないなあという実感をもった。ボートでどこまでも入って行けるのである。また、デルタの大半の水路は感潮し、1日に2回流向を変える地域も広く、そういうところでは流れを利用して流されて川を下りまた流されて川を遡れば、手漕ぎのボートでも楽に行き来できる。デルタ中に張りめぐらされた水路には常時新鮮な水が流れている、というメコンデルタだけに恵まれた条件は、このデルタに特有の土地利用や集落形態や舟運のかたちを決めると共に、この広いデルタにある種の等質性をもたらしているようだ。このことが、「辺境がない」という印象につながるのかもしれない(写真7)。

1974年には、水路に入りこみたくともそうはできなかった。水路に沿って連なる集落地帯はいわば全体が戦場になっていたからである。20年を経たいまでも戦場の痕跡はいたるところに残っている。30年生以上のヤシの幹には多くの弾痕が残っているし、水路に沿ってあるいは水路をはすかいに横切って、爆弾がつくった円形ないしは不整形の池が点々と線状に連なっていたりする。

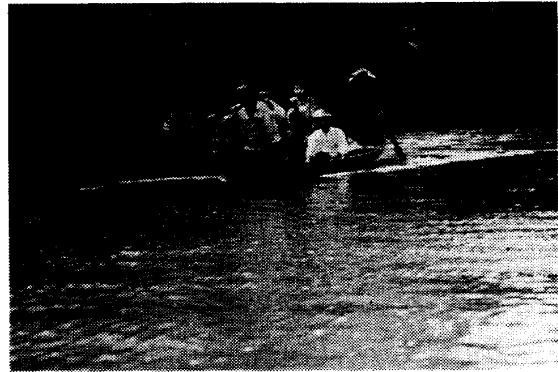


写真7 デルタの交通は舟運にたよる。とくにアクティヴデルタにおいては、自然・人工の水路の密度が高い。

戦後、村びとたちが最初にやったことは水路沿いの集落の再建であった。ヤシを植え直し、家屋を修繕し、前庭を整え、裏庭ではブタを飼い、魚やアヒルを飼い、畦立てをしては小さい果樹園を少しずつ広げていった。その背後はもちろん水田である(図6)。こうして「米・魚・家禽・果樹複合」経営を取り戻したのであるが、如何せん市場がほとんど閉ざされていたために、村びとたちの経済活動は活気づくことなく、まるで火が消えたような状態で10年を空費した。この変化は、アクティヴデルタの景観の変貌を念頭において述べているのであるが、「葦の原」や「ウーミンの森」や浮稲地帯を除いて多かれ少なかれデルタのほとんど全域で生じたことである。

ドイモイと共によく1987年頃から、先に述べたような「専作的果樹園化」が生じたわけであるが、これがアクティヴデルタを主としながらも、多かれ少なかれデルタ全域でワッと広がったのも、このデルタに辺境がないと考えれば納得できる。

さて、メコンデルタにおける舟運はこれからどうなるのだろうか。チャオプラヤーデルタのように、ほぼ完全に道路交通に置き換えられるのであろうか。地方の小都市や村むらの市場は、大都市や大集散地の交通体系に合わせざるを得ないであろうから、これからは急速に陸運に傾いてゆく方向は、止めようがないであろう。地域間の物資輸送は、バルキーなものを除いて、陸運に取って換えられるとして、地域内の人や物の移動はどうなるのであろうか。水運を維持するのか、陸運に換えてゆくのかに

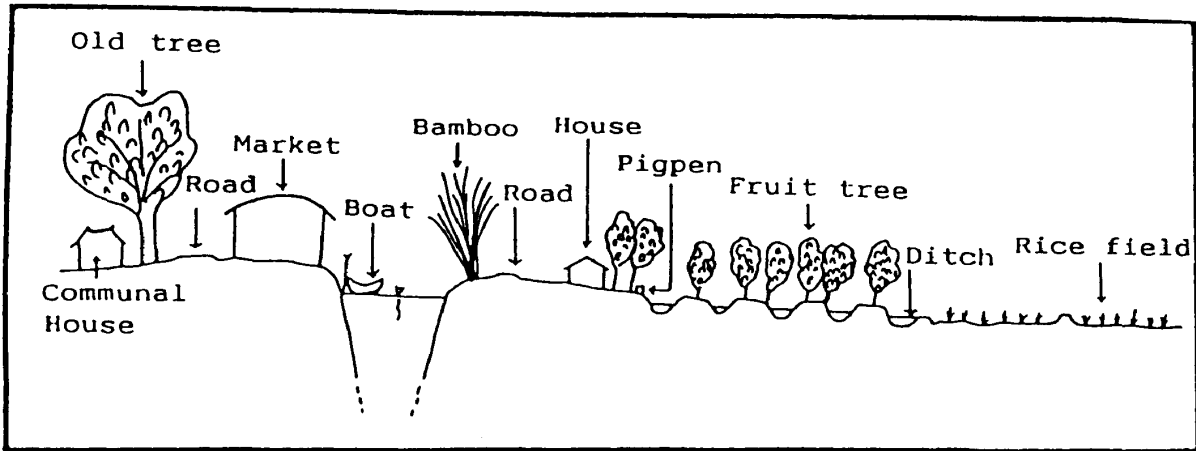


図6 ベトナム人集落の典型的な土地利用。世帯毎に「米・魚・家禽（ブタが多いが）・果樹複合」経営の萌芽が見られる。(Nguyen Huu Chiem 1994)



写真8 大きな水路が交わるころには、ほとんど例外なく大きな市場ができる。ここはホンミー、5本の大水路が交叉する。物産の輸送はほとんど舟運による。

よって、このデルタの景観はたいへん違ったものになる（写真8）。

ところで、チャオプラヤーデルタの交通体系はここ30年間で陸運に統一されてしまった。これにはこうなる理由があった。第1にタイ全体の交通体系が基本的に陸運であること、第2に物産のほとんど唯一の集散地バンコクの水運が（チャオプラヤー川本流のある区間を除いて）崩壊し陸運に統一されたこと、第3にデルタに引きめぐらされた灌漑水路網の水路堤上の管理道路が地域内および地域間道路として機能しはじめ、自動車交通が急速に浸透したこと、そして第4にデルタの水路網に水位調節用の堰が増設され舟運をブロックしたこと。こうしてデルタ舟運は短期間に衰えてしまった。水路沿いは集落地となっているから、道路は多くの場合集落の背後

に新たに通されることとなったが、こうして集落の水路に面した表玄関がいまや裏口となった結果、水路は見捨てられ管理はゆきとどかなくなり、水質は急速に悪化し、かつての水郷集落的な景観も同時に消滅しつつある。

（3）舟運を中心に集落整備を

上のような諸変化に直面して、私の個人的な関心は、生産基盤のさらなる整備よりは、むしろ生活基盤をどのようにつくってゆくに傾いている。要するに、メコンデルタでいま正念場を迎えているのは集落整備だと思えるのである。メコンデルタの水路を巡りながら、私は図7のようなスケッチを書いてチムさんに見せた。

要は、集落あるいは地方市場において、地域間道路交通と地域内水路交通を上手にリンクさせることである。そのためにはその交点に駐車場と並んで広い舟溜りが必須で、それを掘り上げた土砂で広場をつくり、市場、役場、学校、ホール、寺院、駐車場などを配置する。この部分が集落の中心地となり経済活動を支える。現在の水路沿いの村や町が、集落景観はともかくとして、市場などは少し過密になったとたんに急に不潔になり雑然として半ばカオスに近い状況に陥るのは、こういう公共の広場をもてる余裕がないことが大きな原因であるように思う。

水路沿いの集落の穏やかな表情は何とか維持したい。そのためには水路が常に表の顔を保ち、かつ灌漑、舟運、雑用水など多目的に使われることが必須

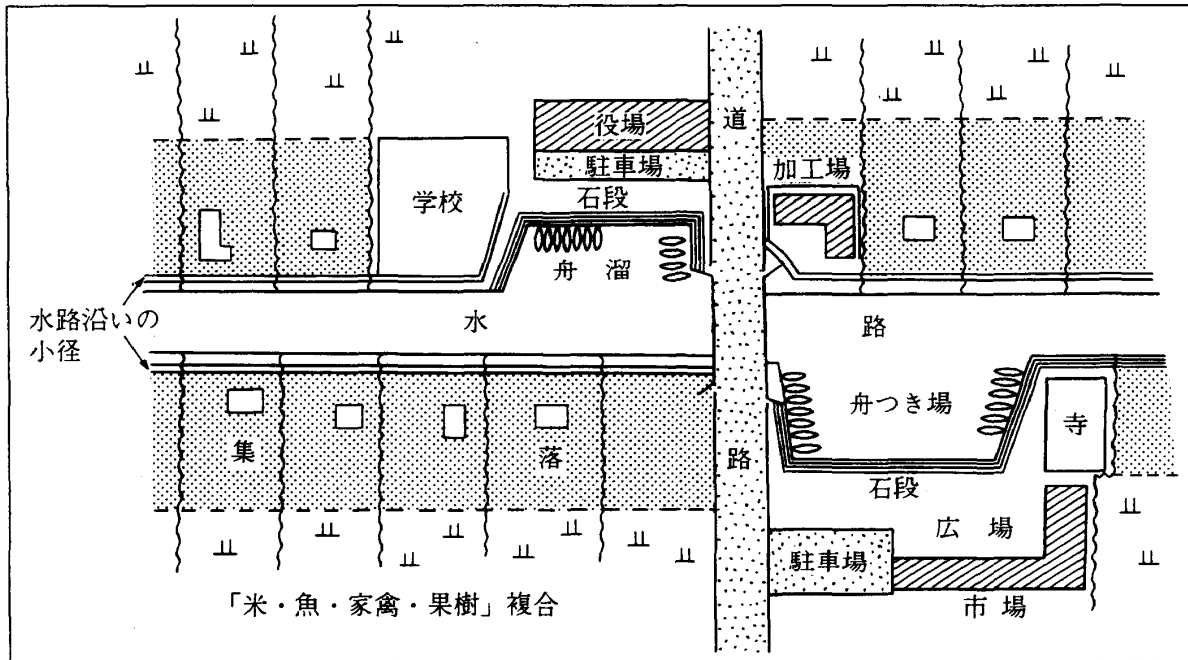


図7 舟運をいかした交通・集落計画のスケッチ。メコンデルタの集落計画は、水辺の景観をどうかすかにかかっているように思える。

である。とりわけ舟運は、水路が表の顔を維持するためにもっとも大事な条件である。舟運を放棄した水路は、たとえ灌漑などの機能は保てても、ゴミ溜めのごとくに汚れ水質は悪化し景観として荒れてゆくことは、日本のみならずチャオプラヤーデルタなどでも証明済みである。

これも、私だけの思い入れかもしれないが、メコンデルタで観光の対象になるのは、「水の景観」ぐらいのものである。とりわけアクティヴデルタの「米・魚・家禽・果樹複合」地帯の緑濃い水路沿いの人文景観は秀逸である。入りくんだ水路のボートツアーなどは悪くない。後で述べるように、私が会った幾人ものこの地方の役人さんたちは、二言目には物産のマーケティングや輸出の可能性ばかりを言うのであるが、私は彼らとのくつろいだ会話の中ではこう言ったものである。「この果実や魚や自慢のエビやカニは、ただ運んで売るよりも、遠来のお客さんや外国人のお客さんに来てもらって食べてもらってはどうか。そうすれば付加価値がつくし、バス、タクシー、ボート、ホテル、土産物、レストラン、案内・ツアー産業など波及効果もあるじゃないですか。キャナルツアーなんて結構受けるんじゃないですか」。反応はもうひとつであった。さす

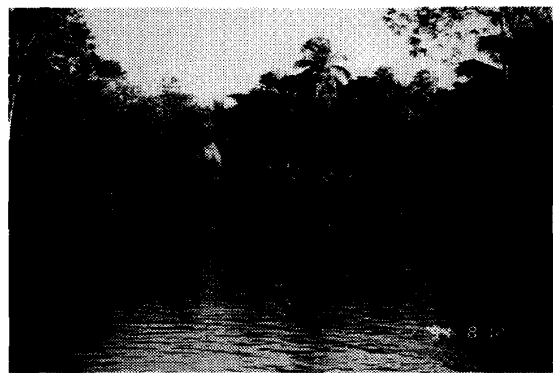


写真9 アクティヴデルタの水路。自然水路なのか掘られたものなのか。いずれにしても年を経ると穏やかな、緑濃い水辺景観を生みだす。

がにいまのインフラ、全般的な社会状況からは、まだ観光なんて、というところだが、可能性はそう低くない。その日のためにも、この自慢の自然・人文景観はぜひ残しておいてほしいものである（写真9）。

Ⅲ 私が会った人たち

(1) 地方役人たちの元氣

ここまでに述べてきた見聞録は、興味のおもむく

ままに行きあつた事例を取りまとめたわけではない。そういう気ままな調査は、まだこの国では許されない。チムさんのつくった日程を一日も遅えずこなしていったのは、わけがある。カントー大学から県事務所宛てにあらかじめ日時を指定して訪問願いを出しておき、農業担当部長クラスに表敬、調査の意図を説明し、彼らから概要説明を受け、そこから郡事務所に引き渡される。郡事務所でも再び表敬、当方の意図説明、地域の概要説明が繰り返され、さらに行政村（Xa, サ, 社）に紹介される。現場にはたいい郡の担当官と社の長が同行してくれる。

県の担当部長クラスは、長年そのポストにあり県下の情勢をことごとく押さえています、といった風の能吏で、聞いてみるとたいいはいかつてベトコンの猛者である。県によっては、行政部署と重複するかたちで設けられているベトナム共産党委員会の副委員長クラスが対応することもある。こちらはハノイ派遣あるいはベトコンのベテランで、同じく地方の情勢にはよく通じているようだ。郡事務所では、たいいはいカントー大学出の若手農務部長と50歳前後の温厚そうな風体の副官がペアで対応してくれる。前者は技術者、後者は地元大きな影響力をもつ元ベトコン戦士である。社の管理職は30代から50代にわたり、地元生え抜きの元ベトコン兵士が大半とのこと。社の行政は、どちらかと言うと若手が上に立ち、温厚な中年が見守っているという印象である。

県、郡、社を通じて、地方役人たちは快活で元気がいい。地元の支持を得て淘汰を勝ち抜いたという自信に基づくものだろうか（写真10）。

ベトナム戦争終結の直後、ハノイは小中学校の校



写真10 村役人さんたちと和やかに談笑する。

長をはじめ各レベルの行政にも北の筋金入りの共産主義者や技術者を送り込み、南の人たちの再教育をはじめた。農地改革も断行した。南の人たちは北の人たちを熱烈に歓迎した。ホーチミンの「独立・統一ベトナム」政策に未来を託したからである。

しかし、これはちょっとおかしいぞ、何かが間違っているぞ、と気づくのに3年とはかからなかった。北からの校長は南の教師に「生徒は同志である」と教えた。教師は生徒と友達づきあいをはじめ、ディシプリンは崩れてゆき、生徒は勉強しなくなった。北の技術者は「近代的な」農業技術を採用入れることを急ぎ、共産党は南の人たちをやみくもに水路掘りなどの強制労働にかりだした。メコンデルタの実情を無視したとんちんかんな技術導入や工事が続くと、さすがに人びとはサボタージュをはじめた。農地解放によってそれまでよりずっと多くの人たちが耕作者になったが、精農が排除される一方で在村の教員、郵便局員やは無頼の徒にまで平等に農地が与えられた結果、結局は上手に使われない荒れ地が広がっていった。市場はほとんど機能せず、人びとは家族の生きのびることだけを考え、自家用の物しか作らなくなった。デルタ中、まるで火が消えたようになった。こんな状況が1975年後半からほぼ10年間続くなか、ハノイからの教員や技術者は徐々に淘汰され、彼らに迎合する南の地方役人も次第に立場を失なっていった。

以上は、チムさんの受け売りである。チムさんはメコンデルタの中心地カントーからバイクで30分の距離の、運河沿いの豊かな村で育った。中学生の時に父親を失い、長男として母親を助けて自ら農地を経営し、高校時代はアメリカ軍の空爆の中をカントー近郊まで通学し、戦後カントー大学に入学、勉学のかたわら農業も続けてきた。こんな彼の言うことだから、そう間違っただけではなからうと思うのである。

第2に、県はおろか、郡、社にいたるまで地方役人たちは国際化指向である。県の部長クラスは、1、2回はバンコクなどに出張した経験をもつ者もいて、「我が県の物産の振興の要諦は国際化にあり」と認識している者が多い。ひとあたり県の概要説明をめぐる質疑応答が終わると、私に向かって言うことは決まって、「日本あるいは台湾などとの交流の仲

立ちをしてはくれないか」というものである。これは、まあ分らぬでもない。ところが、郡に行っても同じことを言われ、さらには果実などを産する村むらでも村役人が同じことを言うのにはまったく驚いた。物産の流通を近隣から地域に広げ、中部ベトナムやハノイ、さらには隣国のカンボジアなどに広げてゆくことには、さしたる期待を抱いていないようで、いきなり日本韓国台湾である。貧乏なところを相手にしてはラチがあかないと言うのである。まあ無理もないかも知れない、とも思うのであるが、彼らの実務知識のなさも、相当に心許ない。外国語とくに英語、情報収集、自由な商業活動、金融システム、品質管理、検疫防疫、輸送などどれをとっても日本韓国台湾などと交易を取り結ぶには、システムが未熟すぎる。彼ら地方役人の態度は、まるで井の中の蛙が天下を望んでいるようにも見え、いささか滑稽ですらある。しかし、一方で、彼らの楽天的なバイタリティには圧倒される。彼らが、近い将来、ベトナムを変えてゆきそうな気もするのである。

(2) 地方と地方を結んだ国際交易はできないか

西海岸のカンボジアとの国境の町ハティエンを訪れたついでに、新しく造成されたハティエン海港とやらを見に行つた。ハティエンからラクジャ方向に海岸沿いに40キロばかり南下した海岸にある。道幅だけは広いがデコボコだらけの土道を2時間も揺られる。近くに幾つものセメント工場があるのに舗装もしていないとは、といぶかりつつ着いたハティエン海港には船影は見られない。4階建ての立派な税関の建物はあるが、ほとんど人影もなく、何故かそこからは大音響のラジオ音楽が流れてくるのみで、港の保税倉庫の一部には小さなイリコ加工工場が入って細々とイリコを作っているのである。このあたりは珍しく多島海的で、海港の真正面にも小さな島があって、波をさえぎってくれ、深度もまずまずのようだ。ただ、この港は、誰も使わないのだ。

政府の肝煎りで造られてからそう日は経っていない。堆積が進み大きな船が入港できない現在のハティエン港の代替として、またホーチミン（ブンタウ）やラクジャの既得権益を避けて自由な海港をつくるという政府の思惑は理解できないこともない

が、その運営を中央集権的に規制したために、誰もこの港を使わないので、結局見捨てられたのだそうだ。

このことは、先の地方役人の壮図とも関係する。この国の行政システムのもとで、郡が県に、県がホーチミンに、ホーチミンがハノイにお伺いをたてて在外公館と交渉の上で、物産交易を実現させる、などと考えてはハティエン海港の二の舞である。この点、ラクジャ港は独自の進み方を示しはじめてるように見える。ラクジャの農務部長は、私たちと会ったその直後にタイから来る商人と会う約束があるとのこと、このような外国と地方の直接取り引きが自由にできるようになれば、このデルタはますます活気づくであろう。ラクジャの港には無数の漁船のみならず小さな外航船がたむろしているように見受けられる。地図を見るまでもなく、ラクジャはホーチミンやましてハノイに向かって開かれているのではなく、カンボジア、タイ、マレーシアと一衣帯水、自由な地方間交易の拠点たる地政学的な位置を占めているではないか。

(3) クメール人

デルタ東南端の砂丘列地帯は、元来クメール人の世界である。チャビン県に入ると、人口の4割がクメール人、郡によっては6割、また社によっては10割がクメール人口であることもある。砂丘列地帯に入ると、まず目につくのがホペアの大樹が繁る広大な小乗仏教寺院の境内、その中に配置されたクメール様式のきらびやかな布薩堂(写真11)と目を見張るばかりに凝った装飾を施したコンクリート造りの

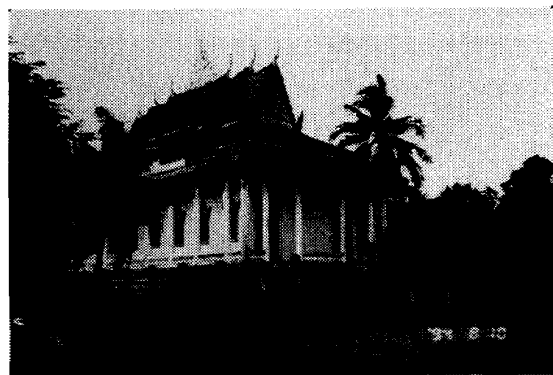


写真11 海岸砂丘列は元来クメール人の世界。華やかな小乗仏教寺院が目立つ。

本堂である。黄衣の見習僧が交々に木蔭でくつろいでいる。

反面、砂丘列上を長く伸びる集落の何というみずぼらしさであろうか。とある集落に入ると、週日の昼間というのにワッと女子供に取り巻かれる。男の子のボロボロのズボン、女の子のヨレヨレのワンピース、裸足、蓬髪、一種動物的なまなざし、赤裸々な好奇心と羞恥心の同居、特有の体臭など、私は、バングラデシュでの経験もあって、学校に行かぬ児童たちの特徴をすぐ見分けることができる(写真12)。多分、恵まれた何人かだけが小学校に通わせてもらっているであろう。割竹を編んだ壁、草で葺いた屋根、2間の土間にはわずかの炊事道具と夫婦用ベッドがひとつ。子供らは雑魚寝するのであろう。最低の暮らしぶりと言っている。

貧しい暮らしぶりの理由をこの地域の生産性の低さに求めることはできる。屋敷地には、乾季の乾燥が厳しすぎるせいか竹の叢林とカシウナツしか育たない。砂丘上にも幾列かの水田はあるが、その生産性は最低である。砂丘列の間のラグーンは塩分が多くまた酸性土壌でもあることによって稲作は困難かつ不安定である。しかし、同じ条件のもとで、ベトナム人は違った経営をする。あるラグーンでカンボジア人が所有する土地の半分をあるベトナム人が買い取り、隣り合って営農している例に行きあったが、その差のあまりの大きさに一驚したものである。ベトナム人は少しずつ高畦を掘り上げてゆき、その上で野菜を作り、グアバ、ミカン、マンゴー、ココナツを植え、ユーカリを植林し、畦間で魚を飼い、小池で家鴨を飼い、沼では蓮の茎を採取して市場に持ってゆき、背後の水田では品種を選んで完全



写真12 海岸砂丘列のクメール人集落にて。

二期作に挑戦していた。カンボジア人の方は、面倒な高畦づくりなどには見向きもせず、大苗押し込み式移植年一期作という例の伝統的な稲作で満足しているように見えた。

あるベトナム人地方役人の、吐きだすようなコメントが印象的であった。この地方のカンボジア人は収入の半分以上を寺に寄進させられている。あんなことで暮しがよくなるわけがない、と。私には、まだどう解釈していいのかわからない。息子たちをあの豊かな寺に入れ、自分たちも仏日にはあの豪華な本堂に集って一緒に至福の時を分かち合うことができる、食うや食わずの日常も信仰によって浄化される、とカンボジア人が考えているのであれば、彼らはたいへん豊かな生活を営んでいるとも言えるのであろうから。

IV メコンデルタの将来景観

メコンデルタの景観の将来像を予測するつもりはない。それをしたところで、また以前のように、思いもかけない展開によってとんでもない間違いを犯すであろうからである。しかし、このデルタはこんな急展開をとげて、結局どこへ向かおうとしているのであろうかと、このひと月いつも考え続けながら旅していた。

東南アジアとその周辺には3つのタイプのデルタがあるような気がしている。ベンガル型、チャオプラヤー型、そして広州珠江型である。ここで詳しく論じる紙幅がないが、かいつまんで言うところである。

ベンガルデルタという氾濫原デルタは、その地文水文的成り立ちから、かなり古い時代から小さなグループによる半ば自主的な開拓を許容してきた。このことが、いま、約7万の村がまるでケシツブを播いたように約700万ヘクタールの世界第一のデルタに満遍なくかつ個々独立して分布しているという、独特の景観を生んでいるように思う。行政的にも経済的にも文化的にも心理的にもそして物理的にも、ヒエラルキーの弱い等質な農業空間である。「野の世界」といえる。このような「野の世界」の農業と農村はそれなりの重いモーメントをもって、容易に変り得ない何ものかを秘めているように、私には思え

る。

チャオプラヤーデルタ、とくにその下部デルタは、19世紀も後半になって、「米のプランテーション」のために、運河開鑿という手段をもって組織的に拓かれた歴史をもっている。比較的温和なこのデルタは、第2次世界大戦後ほどなくして水文的に完全に制御され、米単作から果樹や魚を含めた多角的な土地利用を見せるようになり、タイでも飛び抜けて高い生産性を誇ったのも束の間、引続いて起ったタイ経済の急成長の波に乗り、加速的にバンコク近郊という性格を強めつつある。チャオプラヤーデルタの開拓農民は、「野の世界」の農民というよりは、はじめから機敏に機会をみる能力にたけた「オポチュニスト」だった。

珠江デルタの開拓史は、チャオプラヤーやメコンデルタに比べると、一桁は古い。長い過程の中で、水文環境は徐々に制御され、いまや完全に人工化され、デルタ全体に比較的薄く広がった都市的空間を形成するにいたっている。全体は広州経済圏に含まれるが、広州一極とそれに奉仕する空間という関係ではなく、地方色豊かな多くの中小都市を擁している。最近では、その全体が香港経済圏の中に取り込まれているという、二重三重の構造になっている。

さて、メコンデルタである。開拓史的にはチャオプラヤーデルタそっくりであるし、人びとの生活信条も、ざっくり類型化すると、オポチュニスト的であろうか。私には、短期的な展望のもとでは、メコンデルタはチャオプラヤーデルタの後を懸命に追っ

てゆくように見える。そして少し遠い将来の像は、ふたつながら、いまの珠江デルタに求められそうな気がするのである。ただし、メコンデルタがホーチミンの工場地帯あるいは近郊になる必然もまた必要もないであろう。独特の生きかたがあるのではないか。

景観としては、メコンデルタの大部分はいまの農業土地利用が卓越した景観を保っていくだろう。それを支えるのが、独特の水路システムである。大きな潮位変動によって1日に2度も流向をすら変えて、新鮮な水がデルタの隅ずみにまで、あたかも血管の中を新鮮な血液が勢いよく循環するように、行きわたる。これはメコンデルタのみが享受できる天が与えた恵みである。この恵みさえ上手に利用できたら、メコンデルタに特有の重粘土壌とか酸性硫酸塩土壌とか塩害とかの問題も長期的には解決できる。この恵みを受けて、水郷的な集落景観を維持し、生産性の高い稲作と「米・魚・家禽・果樹複合」経営を中心に、舟運をいよいよ盛んにし、「商業的農業空間」をつくりだすことができれば、メコンデルタは将来とも決して魅力を失わないだろう。ただ、この水がいまほとんど限界に近づいていることを知る必要がある。水はメコンデルタではつくりだせない。ベトナムがメコン河上流の中国、タイ、ラオス、カンボジアと協調関係を維持しメコン河の水資源を共同して開発しまた保全しなくてはならない核心はこの点にある。